## Milano, Paris, New York
## finding John Lewis

# ミラノ、パリ、ニューヨーク

## Sir Roland Hanna Trio

## サー・ローランド・ハナ・トリオ

**1. ジャンゴ**
**Django 《J. Lewis》 (6：09)**

**2. スケーティング・インセントラル・パーク**
**Skating In Central Park 《J. Lewis》 (5：32)**

**3. アフタヌーン・イン・パリ**
**Afternoon In Paris 《J. Lewis》 (6：58)**

**4. ミラノ**
**Milano 《J. Lewis》 (5：54)**

**5. バグス・グルーブ**
**Bag's Groove 《M. Jackson》 (6：11)**

**6. ニューヨーク 19**
**New York 19 《J. Lewis》 (7：16)**

**7. ジョン・ルイスの肖像**
**Portrait Of John Lewis 《R. Hanna》 (7：57)**

**8. チャーリーとの鐘**
**The Clarion Bells Of Charlie 《R. Hanna》 (5：12)**

**9. ペルージャ**
**Perugia 《R. Hanna》 (5：49)**

**サー・ローランド・ハナ　Sir Roland Hanna 《piano》**
**ジョージ・ムラツ　George Mraz 《bass》**
**ルイス・ナッシュ　Lewis Nash 《drums》**
**録音：2002年1月日　ニューヨーク**

**＊**

**Produced by Tetsuo Hara And Todd Barkan.**
**Recorded at The Studio in New York on April 1 , 2002.**
**Engineered by Katherine Miller , Assistant Engineer by Eiji Takasugi.**
**Technical Coordinator by Derek Kwan.**
**Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :**
**Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .**
**Front Cover :ⓒEean Loup Sieff / G.L.P. Tokyo.**
**Artist Photos : Tetsuo Hara. Designed by Taz.**

ロッパのあちこちを旅して回る彼の姿を思い浮かべるに違いない。

このアルバムの題に掲載な「ジャンゴ」で幕を開け、「パリの午後」を散歩して、ミラノに到着する。その間にセントラル・パークのアクセルとデトロイト（エルト・ジャクソン作）でアメリカを往復し、アルバムはスイスを経て、イタリアの終着地にたどり着く。ハイライトとなる「ジョン・ルイスの肖像」はタイトル通り、ハナさんから先輩ピアニストへの敬意とその肖像画のようなオマージュだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ジョン・ルイスのファンなら、ジョージ・ムラツとルイス・ナッシュの2人が、2001年の1月に発売した傑作『Evolution Ⅱ』(Atlantic、国内盤未発売)のメンバーであることを覚えていると思いたい。たしかにムラツとナッシュは、ジョン・ルイスの遺作で共演した。このアルバムのキャッチコピーをみると「ジョン・ルイスの音を正と反の2人とともに、サー・ローランド・ハナがこのアルバムを作った」というニュアンスが含まれている。だがムラツ&ナッシュにとって、より深いフレンドシップをもつピアニストは、ジョン・ルイスとサー・ローランド・ハナのどちらなのだろう？

なぜこのアルバムの共演者にムラツとナッシュを選んだのか、その理由をハナさんに伺った。彼の回答はこうだった。"I'm sure you know my feelings for George and Lewis." 要するに「おまえが説明せよ」のようだ。

結論から述べると、ムラツ&ナッシュはジョン・ルイスとも、ハナさんの音楽性をもっとも深く理解している現存するリズム・セクションである。かつてリチャード・ディヴィスとフレデリック・ウェイとゥッリリス・セクションが、ハナさんにとって理想のリズム・セクションだったように、ハナさんと同じピアノ奏者であるエディ・ロックがルイス・ハンコン・ホーキンスのグループでハナさんと何度も共演していたのようにと。

ムラツ&ナッシュといわれて、真っ先に思い浮かぶのが90年代初頭のトミー・フラナガン・トリオだ。このトリオをフラナガン最後のユニットとみなすファンも少なくない。またハナさんとムラツは、サド・ジョーンズ=メル・ルイスのオーケストラで来日、70年代から現在に至るまで、断続的でありながらずっと関係しており、デュオ&トリオの両作を数多く発表してきた。ルイス・ナッシュがリリアンからニューヨークに出てきたとき、ドラムスを師事したのは、当時ハナさんと契約に共演していた（例刀のような切れ味を誇る）フレデリック・ウェイだった。こうした事実をたどるだけで、ハナ=ムラツ=ナッシュの顔合わせの必然性が理解できるだろう。

たしかにハナ=ムラツ=ナッシュの顔合わせのアルバムはこれまで残されていない。だがハナさんにとっては、現在考えられる理想のトリオだといえる。ムラツとっとのが ベテランらしい貫禄な対話をみせ、いま本・行手の間ではお新のナッシュも、ここでは入のマスターを相手に全神経を集中させている。

**[1. ジャンゴ]**　ジプシー出身のフレ才ギタリスト、ジャンゴ・ラインハルト(1910～53)の死を哭悲に、ジョン・ルイスが追悼の意をこめて書いたオリジナル曲。ミルト・ジャクソンの「バグズ・グルーヴ」と並ぶMJQの2大レパートリーのひとつである。圧巻な感じのテーマのメロディを、ムラツとッ&ナッシュがバランスよく分担する。バロック音楽のようでありながら、フレーズのひとつひとつにパッブのスピリッが息づき、それでいてどこまでもロマンティックな演奏。ムラツはハナさんからのフレーズをリレーのトンとうに受けると、バーン・ヒース（MJQのベーシスト）の歌唱的ないうべきパターンをあからさまに弾かず、独自のパターンに転換している。そしてラストテーマに戻る直前で、はじめてヒースのオリジナルパターンを披露するという構成。思わず鳥肌が立ってしまうほどピュ、ムラツの気迫が伝わる演奏である。

**[2. スケーティング・インセントラル・パーク]**　この軽快なワルツは、MJQが映画『ォッス・アゲンスト・トゥモロウ（明日に賭ける）』のために書いた楽曲のなかのひとつ。ゆったりとしたワルツのテンポ、さも夕ときどきらめくようなイメ・ジ、そして、ハナさんのハ音楽はのびやかで、文字通りスケーティングのように楽しげ。ベーシストのムラツ&ナッシュ、ドラムスのルイスの3人が、ハナさんのピアノ音楽をとことん楽しんでいる。「ア・チャイルド・イズ・ボーン」、「エニグマ」、「タイム・フォー・ダンサーズ」、「ジス・タイム・イッツ・リアル」など、これまで何度も聞いてきたハナさんのロマンティックなオリジナルとオーバーラップする。

**[3. アフタヌーン・イン・パリ]**　ジョン・ルイスがサッシャ・ディスティル(2)、バル ネ・ウィラン(b)、クニー・クラーク(ds)らと共演したアルバム(Atlantic)で有名なこの曲は、もともとは1949年に口ジョンソン(ib)のセッションのためにルイスが用意した。1曲目からゆっくりスタートし、2曲目で少しペースをあげたトリオは、ようやくこのトラックでスピードを適度のモードに設定する。ハナさんはテーマのメロディを少し意図的に弾かないことで、聞き手に驚きをもえる。ゆっくりと調気しながらバリを歩木道を散歩するジョン・ルイスの解釈とは対照的に、ここでのハナさんはムラツ、ナッシュとバリの街角唯で快適なドライブを楽しんでいるかのようだ。ムラツの速いソロのパックで聞こえるピアノのフレーズのなかにも、雪の結晶のように輝いている。個人的にはトーン・フ ラナガンの演奏ですサド・ジョーンズの曲（50～21）のイメージ通なる。

**[4. ミラノ]**　生前ルイスがアンリ・ルノーと行ったインタビューによれば、この曲はもともとルイスがファッツ・ナヴァロ(tp)のために作曲し、タッド・ダメロンが編曲をほどこした楽曲だった。最初のタイトルは「ナヴァライズ」で、のちに「ミラノ」に改題されMJQのレパートリーとして定着した。多くのリスナーは、まず最初のアレンジでハナさんのピアノのテクニックに圧倒されるだろう。リズムが加わって、リラックスしたテンポで始まるこのメロディは、ピュ・ヴァンソンのあたたかいタッチ、イタリアの都市らしい荘厳な美しさを感ずいる。アプローチの多彩さとハーモニーの分厚さ。さすがハナさんという演奏である。

**[5. バグズ・グルーブ]**　ご存知のようにこのアルバムはジョン・ルイスの作ではない。だがルイスが音楽監督をつとめたモダン・ジャズ・カルテットの最重要レパートリーのひとつであるからか、ハナさんがあえてここで取り上げたのも容易に理解できる。この曲のはハナさん と同じ時期トロイトの先輩とルト・ジョンソン(tp)(1～99)、ムラツのイントロに続き、原曲のテーマが登場、さらにはディジー・ガレスピーの「パーク・ス・ワークス」が出てくる。MJQがディジー・ガレスピーのビッグバンドが誕生した経緯を知る者には、ハナさんの「ジョーク」をユーモラスに感じるだろう。音数が多くなったり、少なくなったり、変幻自在のアドリブ、ベースとドラムスもしっかり呼吸をひとつにしている。

**[6. ニューヨーク19]**　ルイスが1962年に映画音楽用に書いたこの曲を、評論家ダイリ ー・ギディンスは、「ルイスが書いた多くの楽曲のなかで、もっとも魅惑に富んだメロディのひとつ」と評した。20世紀の初頭に書かれたボビュラーソングとアメリカンパラドの伝統に根ざしていることがよくわかる。テーマはストロ・ボーン、アドリブ二入るとディ・アム・ジ・ボ・ッ&ムとスイングしていく。ハナさんのピアノ演奏は、このアルバムのなかで、もっともジョン・ルイスのスタイルに近づいている。

**[7. ジョン・ルイスの肖像]**　このアルバムはどんもサー・ローランド・ハナの気分いが伝はる余心の演奏がずらりと並べているが、事者にとってもセッションもムレ、いレ、ヒューマニズムに満ちた喜びと感動を与えてくれるのこの曲だ。とくにリズムの2人が加わるまでのわずかな時間、ルバートで弾くソロピアノの素晴らしさを、どう表現しようか。もし思わず息を止めて聞いてしまう音楽があるとすれば、これはそのひとつだろう。華麗な力強さを内面に秘めたソフトなタッチ、澄み切った空気に包まれた美しい情景、3つの音で作られるリズムパターンの面白さはルイスのオリジナル「アニマル・ダンス」を思わせ、呼応するドラムス、サラ・ヴォーンを思わせるフレーズなど、テンポが快まってからの展開はまさに圧巻だ。ハナさんはこのトラックの作者ルトの思ろうが、筆者には「サー・ローランド・ハナの肖像」に聞こえる。ルイス・ナッシュのブラッシュは、（風のように演奏した）ジョー・ジョーンズ=エディ・ロックからの影響も相聞みる。

**[8. チャーリーとの鐘]**　これはジョン・ルイスとは関係のないハナさんのオリジナルだ。ハナさんがこれまで録音したオリジナル曲の数は400を越え、この曲はハナさんが3年ほど前に書いたもので、今回はほとんどの録音となる。世界の名都市はもちろん曲目が並ぶなか、スイスのチェーリッヒにある何名な機をイメージしてハナさんが書いたドラマティックな名曲。ルイス・ナッシュのシンバル部の響きを彷彿とさせたかと思うと、後半のベースソロではテンポをあわ、よりスリリングなステージへと発展していく。

**[9. ペルージャ]**　アルバムの最後は1974年のモントルー・ジャズ祭でのライヴ盤(Atrius)のアルバム・タイトルにもなったこの曲で締めくくる。ペルージャはイタリアの北部、この町の若は自治区は歴史的な国際音楽を進めている。ペルージャは中世的であるがゆえ、民族的な不調査な美しさを提示している。エンディングのテーマの美しさは、まるで映画音楽のエンディング、劇場でひとり座ってタイトルロールを眺める気分にさせてくれる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

このライナーノーツの最後に、偉大なるサー・ローランド・ハナがムラツ、ナッシュという盟友と作り上げたこの音楽に、等者は最大の賛辞を送りたい。まず敬愛するローランドの音楽について文章を書くチャンスを得たことにも感謝したい。素晴らしい音楽家として、人生の先輩として、彼に大きな敬意を捧げると同時にこの場を借りてお祝いしたい。ローランド、ぜひこのトリオでの来日公演を実現させてください。

2002年5月　編集　誠 / Makoto Gotoh